

# 若いお母さんたちへ

はるにれの会

橋本 都

今年の夏は、いろいろな所で、子ども達と触れあう機会がありました。今まで、自分の子育てに精一杯で、その上、仕事を持ってめまぐるしく生活して来ましたが、他の子どもの姿をゆっくり眺めたり、ましてや遊んだりということは、あまりなかったように思います。それが、息子のHも小学校高学年となって、一人で大抵の事ができるようになると、自然に他の子ども達にも眼をむける余裕のようなものがでてきたようです。そして、



自分の子ばかりではなく、触れあった子ども達を愛しく思うようになりました。

実は、私は大学で少しばかり子どものことについて学び、幼稚園や小グループでの実習を通して、子どもに接してきたのですが、いわゆる子ども好きで積極的に子どもの中に入っていけるタイプではありませんでした。子どもの遊ぶのをみているのは楽しいし、何か一緒になっ作ったりするのは好きですが、子どもってどんな事を

考えているのだろうと見ていた方だったのです。ですから、共に遊んで楽しかったと言えるようになったのは、私自身も、子育ての間に、子どもを通して少しずつ変わってきたからではないでしょうか。そうして、子ども達と遊んでみますと、一人一人の違いをあらためて確認したり反対に自分の狭い子育ての中で、困ったことだとか自分の子どもだけではないかと悩んでいたことが、普通のことであったことに気が付かされ、また新しい気分になさせられるのです。

ある日のこと、私は久しぶりに中学時代の友達三人と会い、楽しい一刻を過ごしました。結婚して遠い土地で暮らしている友人とは一年ぶりの再会だったので、話に花が咲きました。中学時代の友人ですから、もう知り合ってから二十年以上になります。知り合うきっかけは名簿番号が近かったぐらいなのに、それぞれに家庭を持って、こうして話ができることをうれしく思います。話の内容と言ったら、やはり子どものことが中心ですが、飾らず言いあえるのですから、とてもほっとします。

そうこうしているうちに、それまで子ども同士で遊んでいるN君がやってきて、にたっと笑い、ふざけるように、「うんこ」「おしっこ」とか言っては、我々母親達の中に入りこんできました。N君の母は「やめなさい。」とすかさず言うのですが、またやって来ては言うという行動を何度も繰り返したのでした。彼女は気になったのか、「上のお兄ちゃんはどうでなかったのに……同じに育ててもねえ……」と私達に言うのでした。私達は皆、子どもを持つ身ですから同様の経験がありますし、そう驚くことではなかったと思います。

しかし、私はこの場面がとても印象的でした。N君はダダをこねるような悪い気分ではなく、母親達の邪魔をしようとしたのでもないようです。母の眼を離れて自由に遊べるはずなのに、まだ自分の世界に没頭できない。母は子どもから離れて談笑している。そんな間において発せられた行為だったのかも知れません。

しばらくして別の友人のSちゃんがやって来ます。Sちゃんはとても利発な女の子で、息子と同じ小学校に通

っているので、作文に入賞したり、リレーの選手になったり何でもよくできるのをよく知っています。私達が子どもの話をし始めると、Sちゃんがすーっと入ってくるのです。お母さんが、慌てて、「あっち行って遊びなさい。」なんて言うと、「ここがおもしろそうだもん。」と言って母の隣に入ってしまうのです。私達の話をきいていたというより、私達も久しぶりの再会で賑かにしていましたし、普段もの静かなSちゃんのお母さんも笑っていたので、その空気が魅力的だったのではないかと思いましたが。だから、きっとN君もわざわざ「悪い」言葉を使ったかったのではないかと思うのです。

次に私の楽しい体験を話しましょう。一週間程の間、姪（五歳）と甥（一歳半）が我が家に遊びに来ていました。台風くずれの雨の日が続き、絵本を見たり、家の中を探検して遊んでいましたが、自分の家とは勝手が違ひなかなか熱中して遊ぶことができませんでした。夕食も済んで、暗い奥の間の方へ子ども達が入っていきますと、偶然、廊下の物影が障子に映ったのです。息子Hが

小さい時にもこんな事があって、影絵遊びをやったことを思い出し、犬の形をつくってみますと、子ども達も興味をもって集まってきました。初め、暗くて恐がっていた甥も慣れて、影が次々と変わるのを楽しみました。Hもおもしろがって、大きな懐中電灯を持って来て、自分で影を作り出します。終には、自分の足を映し出して、何でしょうなどとやるものですから、幼い子ども達も真似をして、見る側になったり、やる側になったりして遊びました。時間にすると、それは三十分位でしたが、大人も子どもも楽しんだ時間でした。

影には、Hも四、五歳の頃、とても興味がありました。パジャマに着がえながら、螢光スタンドの光に照らされて、押入れに映る自分の大きな影でよく遊んでいました。「怪獣め！」などと叫んで、ポーズをとるのです。私でも居ようものなら、私の影は怪獣にされてしまうのです。自分の影でありながら、自分よりずっと大きく、力強くなるのですから変身遊びの大好きなHにはとても楽しい遊びだったのでしょう。夜、近くのスーパーまで

子どもと買物に行くことがあります。途中影踏みをして楽しんだりするのも、Hも、私も、そんな事が好きなのでですね。皆さんも、懐中電灯に手をあてて、真赤になった手をひらを見たり、オバケごっこしたことを思い出しませんか。このような楽しい体験があったから、偶然の手掛りを見つけたのではないかと思います。

次に、高校時代の友達のお宅に行った時のことです。

二番目のYちゃん（四歳）は生まれたばかりの時会っただけです。初対面のようなものでした。彼は、今日はお母さんの友達が遊びに来ると聞かされていたらしく、盛んに私の方に近づいてきてきます。「お母さんの友達？」と問いかけ、「そうよ。」と答えると安心して、しばらく、大人のまわりでテレビをみたり、うろうろしていました。そのうち、「いい事考えた。」と言って、ティッシュペーパーをまるめて、セロテープでとめ、飛ぶようにしてやって来ては、「これ何だ？」と見せるのです。うまく当たると、「当たり〜」と大声をあげ、はずれるとはずれたで、とてもうれしそうに反応します。初

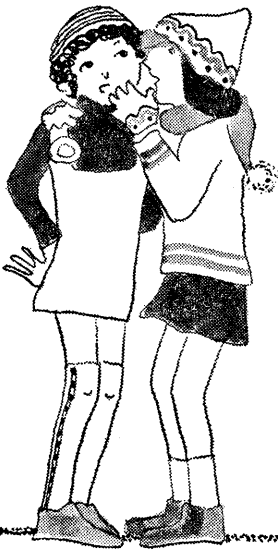
めのうちは、ヘリコプターとかよくわかるものだったのに、ストローなども使って複雑になり、ヒントを与えてくれたりします。ジュースと水を同時に飲めるストローなどをつくっては、実際試してみたりし、遊びがひろがっていききました。

お母さんは、「いつもこうなのよ。」と、ティッシュペーパーの山を見て、うんざり加減でしたが、次から次へと出てくるひらめきに、私もあてるのがとても楽しかったのです。息子のHも、ティッシュや、その他の紙を毎日随分使うので、紙代は出世払いにしてもらわなくてはと冗談に言うほどでした。Hもみてみるとよく見せにくるのですが、ほとんど何か家事をしているので、生返事になりやすいですね。お母さんというのは、子どものやっていることを「いつものこと」のような気になってしまふのです。こうして、他の子どもと接してみると、自分の子どもへの接し方はいい加減で手抜きがあるなど反省させられるのです。例え、遊んだにせよ、心から楽しむというより、遊んであげなければという考えが先に立つ

ていたように思いました。

私は、子どもと遊ぶ中で、私達自身も体験した楽しい体験を伝えたいと思いました。その一つは古くからの行事にまつわることです。二月の節分、五月の子どもの日など、幼稚園でも作品を仕上げたり行事を行うところも多いでしょう。私の住む地方では節分のお豆は大豆ではなく落花生を使います。余った落花生をイヤリングにして遊んだりしたことを、その軽い痛みと共に思い出します。端午の節句は旧暦の頃、町のお店で一斉に菖蒲とよ

もぎが売られます。菖蒲湯独特の香りも、私は好きでした。七夕、十五夜、落葉たき等々、次々と出て来ますね。十五夜の時は近くの山へススキを取りに行つて、白玉粉でお団子をつくつて、栗の一枝をとつて、月を家族でながめます。やっぱりウサギが住んでいるような、大きく幻想的な世界です。特に都会では、このような行事がだんだんなくなつてきているといえます。でも子どもとの生活の中に、このようなことがあると、メリハリがつくというのでしょうか、とても楽しくなると思うので



す。そして同時に我々大人も同調して楽しめるのではないでしょうか。

そして、もう一つの伝えたいことは、自分自身が育った時のことです。今では、三十年前にどんな楽しいことがあったかなど、すぐには思い出せないのでありますが、我が家では、母を中心によく歌を歌ったように思います。

さて、私の子育てで、一番頭から離れなかったことは、息子のHが一人っ子であるということです。決して望んだわけではないのにそうなってしまったのです。家庭状況を知らない方は、一人っ子は可愛想だとか、よくないと言います。しかし、一人っ子であることは変えられない事実なのです。「一人っ子だから……」ということはないのだと思いつながら、私のまわりにいる、一人っ子を持つお母さんの話を特に注目して聴いたり、本やいろいろの情報の中で、「一人っ子」という言葉を聞くとき、敏感に反応したものです。

H自身も、一人であることが不満でもあったでしょう。友達が弟や妹の話をするのをきいてきたり、保育園

で、幼い子どもと触れあい、「赤ちゃんほしいな。」と言ったこともありました。私にはできるだけ丁寧な答えてわかってもらうしかありませんでした。

できるだけ意識しないで育てようと思いつながら、つい「一人っ子だから」他の子どもと仲良くできるようにという思いが強くなるのです。そして、どんな友達ができただかということが、大人達にはとても心配なことでした。家の中では激しくぶつかることはないかわり保育園で友人とふざけあって、肩のあたりを縫うほどの怪我也しました。近所の家のまわりでオニごっこして、迷惑をかけて叱られたり、買いたい物を覚えたりとハラハラすることがありましたが、いくつかの約束事……帰宅時間を守ることを、遊ぶ所をはっきりさせること等を守らせてみていました。そうすると、夜寝る前のわずかな時間に、楽しかったことなど、教えてくれますし、友人の名もだいたいつかめました。それでも、年上の子どもが遊びに来ると悪影響はないかと神経質に考えたものです。今では友達は多いほうですし、年上でも年下でも楽しく遊ん

でいるようで、一安心といったところです。

しかし、おもしろいことに、Hはどんなに楽しく友達と遊んでも、一人の時間がほしいようです。保育園の時も、架空の友人をつくって、一人、部屋に閉じこもって遊んでいました。それに、今でもそうですが、自分の姿を鏡にうつすのが好きなのです。小さい頃は、格好いいスタイルをしてポーズをとって、とっくりと見ていました。知らない間に私の三面鏡を使っているらしく、度々開いたままになっているのです。こうなると、一人っ子だからこうなのだというより、Hはこのような生活のパターンが好きだという個性の問題であるように思われるのです。

今、Hは卓球部に入っていますが、他の小学校の生徒と気軽に声をかけあっているのを見ると、仲良く遊べるようにと念じていた私自身が滑稽に思えるのです。

話は変わりますが、Hは幼い頃から意志のはっきりした子どもでした。いわゆる二、三歳頃の「反抗期」の頃は何でもいやだと主張していました。Hのおへそは一八

〇度曲っているのではないかと冗談を言うこともしばしばでした。意地っばりで、私にそっくりだなんて、呆れ顔でよく言われたものです。保育園でのお遊戯などもともにやったことはありません。年寄りからすると、言うことをきかない素直でない子どもでした。でも、その代わりといってよいのでしょうか、自分でやりたいことははっきり伝えるのでした。初めのうちは、大人の言うことに従わないで、とても疲れたのですが、一息ついてみると我がままなことばかりではないようにみえました。せっかく、やろうと思っているのに大人がまわりで何度もたたみかけてせかしたりすると、途端にへそ曲りの悪い癖が出てくるのです。かえって知らんぷりをしていると、「僕やるから」と宣言し、実行するのです。小学校の高学年になった今では、こちらも上手になってきました。例えば、髪が伸びてきたので散髪に行きなさいというところを、いつ行くの？と聞くのです。すると自分でいろいろ考えて土曜に行くと言うと、それまでは祖母に言われようと絶対だめなのですが、必ず、土曜日

に行ってくるのです。

まだまだ、子どもを育てる毎日にはいろいろ困ったことがあったと思います。でも、十年以上のかかわりを経て、子どもの持つて生まれたものをそのまま受けとることに、少しできるようになったのではないかと思います。そして、心から楽しめるようになりました。

今日も、夜、自分で決めた寝る時間が来ました。そろそろ寝るのかなと思っていると、突然、甘えた声で「ママーっ、子守歌！」と呼びます。昨日は、私の掛け布団と自分のとを交換してもらったのに、きょうは、やっぱり自分の布団がいいと、元に戻しました。「子守歌は自分で歌ってごらん。」と言うと、感情をこめて歌います。ほめるとやがて眠ってしまいました。このところ毎日のように子守歌にこだわっていて、一人で時々、ピアノでメロディーを弾いたり、たて笛を吹いたりしています。私はいつまで続くかわからない、こうした子どもとのやりとりを大切にしていきたいと思いました。

随分とりとめのないお喋りをしてしまいました。皆さ

んも、サンタの宝物探しゲームをやって遊びませんか。たくさんの子どもと大人が、どんなゲームをつくって遊ぶか、楽しい一刻を過ごすか、楽しみです。